



TITLE:

1937年度接近の火星観測報告(2)

AUTHOR(S):

木邊, 成麿

CITATION:

木邊, 成麿. 1937年度接近の火星観測報告(2). 天界 1937, 18(200): 46-49

ISSUE DATE:

1937-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167576>

RIGHT:

1937年度接近の火星観測報告 (2)

木 邊 成 磨 (在責)

第 三 表

観 測 者	観測期間(1936)	スケッチ数	シ イ ン グ	同平均	デフィニション	同平均
渡邊 恒夫	^{*1)} Sept.17—Sept.24	101	4—10	6.4	P.—v.G.	M.弱
伊達英太郎	Apr.3—Sept.4	37	2—10	6.0	v.P.—G.	M.弱
前田 治久	Mar.15—July 2	35	3—10	6.7	r.P.—G.	M.強
木邊 成磨	Feb.28—Aug.16	29	4—9	5.8	r.P.—G.	M.強
青 木 章	May 15—July 2	16	?	?	?	?
奥村六一郎	Apr.16—July 1	4	4—6	5.3	r.P.—G.	r.G.弱
龜 島 武	May 12—June 4	3	6—8	6.7	M.—r.G.	M.強
小林 義生	May 29	2	3—5	4	M.—r.G.	M.強
大石 辰次	May 8—May 25	2	8—10	9.1		
中野 義夫		2				
寺 田 稔	May 9	1	7	7	r.P.	r.P.
津久井 修	June 10	1				
田村 文造	June 10	1	8	8	r.G.	r.G.
宗田 三順	Apr. 28	1				

*1) 1936年

第 四 表

観 測 者	¹⁹³⁶ Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	¹⁹³⁷ Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May	June	July	Aug.	Sep.	計
渡邊 恒夫	4	10	9	—	—	2	4	17	23	26	2	0	4	101
伊達英太郎	—	—	—	—	—	—	0	10	14	10	2	0	1	37
前田 治久	—	—	—	—	—	—	2	8	11	12	2	0	—	35
木邊 成磨	—	—	—	—	—	1	2	4	3	14	4	1	—	29
青 木 章	—	—	—	—	—	—	0	0	5	10	1	0	—	16
奥村六一郎	—	—	—	—	—	—	0	1	2	1	0	0	—	4

龜 島 武	—	—	—	—	—	—	0	0	2	1	0	0	—	3
其 他 七 名	—	—	—	—	—	—	0	1	6	3	0	0	—	10
計	4	10	9	0	0	3	8	41	66	77	11	1	5	235
共同観測期間 204														

上に各観測者の観測概況を表に示した。

6. 観測期間 共同観測は1937年3月～8月末迄を選んだ。然し、上の表で知れる様に、指定期間外に於て、渡邊氏は1936年9月から観測を開始し、伊達、木邊兩氏にも夫々少數の期間外観測がある。従つて渡邊氏は其の間、火星面約六廻轉の観測をして居るのを筆頭に、伊達、前田兩氏は約三廻轉を観測して居る。他は見劣つて居た。

7. スケッチ數 表の通り全部で235枚である。數は前回よりも69枚少なく、約77%であつた。個人に就ては、渡邊氏101が最多である。是れも前回の前田氏140に比較すれば約73%に當る。然し、この程度の減少は何等悲觀すべき材料ではなく、寧ろ豫想より多い方であつた。渡邊氏に續いて、伊達、前田、木邊の順に多く、少し降つて青木氏の16枚であつた。以上五名は獨立に取扱ひ得る枚數であり、大體一人の観測者が、一シーズンに是れ位見れば、數としては事足りる。他の人は色々の理由もあつたであらうが、充分とは云へなかつた。更に一應見逃しの出来ない點は、以上の観測總數中、渡邊、伊達、前田、木邊と、當課の御定まりの連中が202即ち85%を占めて居る事であつて、残りの33枚中、更に青木氏が16枚を占めて居る事、云ひかへれば新しい観測者の甚だ振は無かつた事なのである。何時もの苦情に落ちるが、観測器械の表を參考しても解る様に、15cm 級の望遠鏡所持者が、特に不振な事である。偏へに奮起を期待して已まない。

8. 天候 遊星面の観測は、單に晴曇のみでは標準になら無いし、又特に火星の様に、著るしく視直徑の變動するものでは、結局、接近時前後に観測が密集するのは當然であり、4, 5, 6, の3ヶ月に全數の $\frac{3}{4}$ が集つて居るのは異とするに足りない。最初の目的ではもつと分散する豫定であつたが、實行に移つて見ると、如何にも出来なかつたのである。唯、茲に注意すべき點は、シーイングの

平均が、各個人とも前回の接近時と大差なく、全體の平均値も更によく似て居る事である。(前回6.2, 今回6.5) 所が、器械は平均して餘程大きくなつて居るのだから、各観測者が良シイイングを選んだ事、(それは観測數の減少した幾らかの原因である) 及び、今回の最接近時が5~6月、即ち一年中を通じて、本邦では最も氣流の良い時に當つたのが重大原因だと思はれる。事實観測に際して4月には幾度も望遠鏡を見ては中止した日があつたが、5月に入つてからは其點非常に樂であつた。

9. 特殊な観測

A. 記録のみの観測 観測は行つても、色々の理由でスケッチが出来なかつた時に見た様子を Note に記録したものである。スケッチに比較すれば遊星面の観測としての價值は低いが、無意味ではない。突發した雲の様子や色を記録したものが、前田氏19回、渡邊氏2回ある。

B. 色スケッチ 普通、スケッチは單色で模様の濃淡や、位置を描き、註として色を書き入れるのであるが、文字では色の表現が不充分である爲めに、スケッチ其のものを色付けるのである。何處まで正しく出来て居るかは後に譲るとして、兎に角今回の観測中の白眉であつた。其の數は、前田氏34、伊達氏3、渡邊氏1、寺田氏1(以上はパステル)、中野氏2枚(クレオン)、計41枚得た。

第三章 観測の結果 (伊達英太郎)

10. 北極冠 1936年9月~10月渡邊氏が曉測を開始された當時は、丁度火星の北半球では5月中頃に相當して居た、スケッチに依ると、北極冠は平均30°位の直徑を占めて居る。11月(火星では6月)に入つて、少し縮少して25°位となつた其後観測が途切れたので、火星の夏至近傍の様子は残念乍ら知り得なかつたが漸次縮少して居た事は疑ひ無い。

1937年2月 再び渡邊氏が観測を開始した當時は、(火星7月下半)スケッチからして13°位の擴りである事が知れるが、明瞭には見えなかつたから、確實とは云へない。

3月 共同観測の當初も、2月同様に周邊が明瞭ではなかつた。但し、21日に渡邊氏は明かに存在を認めて居る。前田、木邊氏のスケッチではハッキリ現れて居ない。

4 月 3月下旬から4月上旬は、北極地方一帯が、ボンヤリして居た。渡邊氏に依れば、在存は確實らしく、28日には好シイイングのもとに、恒星像の様に小さい北極冠を認めて居る。前田氏は、上旬には明かには見えなかつたが、20日に極めて小さいが認めて居り。伊達氏は14日に同じく小さい乍ら確實に認めて居る。木邊氏のは出て居ない。然し北極地方には模様もないからして、白雲の様なものに包まれて居た事、及び時々極めて縮小した本體が存在して居たのは誤り無からう。此の頃、火星では丁度、北半球の8月下半に相當して居る。

5 月 渡邊氏のスケッチに依れば、不明瞭な白い部分が北冠の所に常に出て居るが、其れは極めて光輝に乏しく、他の場所に出現した雲よりも輝いて居らない事からして、其れが直ちに北極冠の本體であるとは云へない。同氏も自からその様に註をして居る。然も、この白い場合は、全然認められない（然し黒い模様もなく平凡な火星面の赤色に近い）日もあつた。其上、前田、木邊、伊達三氏のスケッチも、渡邊氏以上に不明瞭な様子であるから、多分本體は消失したか、さも無くとも、30cm 級の器械には映じない程縮小して居り、極地方一帯が、極めて淡い靄の様なもので常に蔽はれて居たと考へても、甚だしい誤りではないと思ふ。北極冠がこんなに迄なつた事は注意してよい事柄である。

— 未完 —

タウンセンド・ハリス渡來日誌の一節

わが日本へ最初に來朝した米國領事 Townsend Harris がインド洋航海日誌一節に、天の星に關する記事がある。こゝに其の一部を譯出する。(7)

1856年1月2日〔安政3年11月25日〕（前略） インドやエジプトあたりで見たあの“犬星”即ち Sirius の星の、強く輝かしい、青い光芒に、私は魅せられた。何だか、私には、金星よりもつと明るいやうに思はれる。デュランド(Durand)大尉の言ふところでは、大尉がインドのボンジャブ洲のベシヤワールに居た頃屢々、この星の光で、時計の針を讀んだことがあるといふ。大昔し、エジプトで、空に見える星々のうち、人々は此の星をアヌビス(ANUBIS)と呼び、犬の首を持つ神様だと考へられたとか、愉快な話である。ヒンドウ人に據れば、今の吾々が“大熊座”と呼ぶあの星座を、彼等はリシ星座と稱し、七人のヒンドウ聖者がシズ神によつて、大空に置かれたのであるといふ。(The Complete Journal of Townsend Harris, Japan Society, New York City. p. 38. 1930)